

遠野から考える新しい世界

松 岡 陽 子

はじめに

大学生の時に海の向こう側への興味をかきたてられ、文化人類学を専攻して以来、頻繁に海外を歩き来している。日本とは言語も文化も慣習も異なる世界に住んだり滞在したりするのは嫌いではない。異文化は自分のなかに新しい世界をもたらしてくれる。不慣れな環境にストレスを感じることもあるが、しかしそれゆえに挑戦し甲斐のある文化的障壁なのである。特にケニアをフィールドとするようになって十年以上経ったが、筆者の青春はケニアに捧げてきたと言ってもいいほど、異文化理解に挑戦してきた。その結果、初めてケニアを訪れた時、奇妙に思えたものは今では当たり前の現実となってしまった。ケニア以外にもさまざまな国を訪れる機会があったが、何度も日本と海外を歩き来するなかで、最初は海外の諸文化が奇妙に思えたものだが、文化的違和感に研ぎすませてきた筆者のアンテナは徐々にホームである日本に反応するようになった。今までまったく無関心であったが、気付いたら日本ほど不思議な国はないのではないだろうか。これまで関心をもたなかった自分の生まれ育った国について、最近に興味が尽きなくなってきた。

グローバリゼーションが劇的に世界を変えていっている現在、最近では世界がどこに進もうとしているのかわからなくなっている。欧米中心主義の価値観が揺らぎはじめ、世界のリーダーシップをとる欧米諸国は現在迷走中である。このような時代の流れのなかで、日本は未来に向けてどのように歩み出せばいいか、その方向性をいまひとつ見極めきれないでいる。

本稿ではこのようなことを背景に、筆者が日本と海外を歩き来するなかで気づいた覚書として日本の、特に岩手県遠野からみた世界について論じたい。

1. 「和」の国、日本

「戦争の世紀」が終わり、21世紀に入ってすでに15年経ったが、世界は未だ安定することはない。戦争、災害、貧困、犯罪、病いなど、私たちの暮らしがあらゆるところで合理化され、

便利になった現在でも、私たちが不幸と隣り合わせの過酷な時代を生き続けていることに変わりはないようである。特に2000年代はアメリカ同時多発テロ事件から始まり、私たちはどこに潜むともわからない「敵」に脅える日々を過ごしている。テロリズムと関係の深い難民・移民問題も多文化主義や寛容性が叫ばれながらも問題が解決する様子はない。近年最も積極的に難民を受け入れていたドイツでも、現実には波乱含みである。特に2015年末、ケルンで一千万人以上の暴徒たちが若い女性に対して性的嫌がらせ、レイプなどの暴行事件を起こしているが、彼らは中東や北アフリカ出身の難民たちであったことがわかっている。国内のメルケル政権への批判も強くなっており、ドイツの移民や難民に対する寛容の精神も限界が見えてきつつある。

現在日本も移民の受け入れについてプレッシャーをかけられている立場にあるが、安易な受け入れは欧米諸国の二の舞になるだろう。ヒューマニズムも重要だが、ドイツの事例にもあるように、衝撃的な事件が起こると寛容の精神はとたんに怒りに変わってしまう。国民の寛容の精神にのみ頼る精神論的対策は極右を呼び込む危険性があるだろう。また、大多数の移民の流入はアメリカで先住民が土地を奪われてきた例もあり、国の存亡にかかわる。簡単には引き受けられない事案だが、しかし世界の経済大国である日本に対する期待は大きく、いずれは何らかの答えを日本は出していかなければならない。たとえ移民を受け入れることがなかったとしても、世界を納得させるだけの外交的政策を打ち出さざるを得ないだろう。その時、日本の寛容なる精神が問われることになる。

寛容性にかんして、日本が政治的に世界にどのようにアプローチしていくべきかはここでは論じないが、日本文化という観点からは日本はもともと異質なものに対して非常に寛容な精神を持ち合わせていると言えよう。その寛容の精神を私たちは「和」と関連づけることが多い。

「和」は日本文化の根底にあるものと一般に考えられているが、その概念は西欧との写し鏡のなかで、最近頃に意識化されるようになった。この「和」のルーツをたどると、今から1400年ほど歴史をさかのぼった飛鳥時代、聖徳太子の治世にたどり着く。

聖徳太子は第33代天皇にあたる推古天皇の摂政として活躍し、天皇中心主義の中央集権国家の確立に尽力したことで有名である。族制国家であった当時は各豪族が互いに権力争いに余念がなく、衝突を繰り返していた。尽きない争いを抑え、各豪族たちをまとめる指標になったのが、官僚の規律ともいえる十七条の憲法であった。ここで興味深いことは第二条に「篤く三宝（仏・法・僧）を敬え」とあるように仏教の奨励が提示されてあることである。太子は第一条で「和をもって貴しとなせ」と説いたが、この「和」とはもとは仏教集団の規律である戒律にあたる。その「和」を世俗の組織に持ち込んだことは当時非常に新しく、太子のパイオニア精神をここにみることができるだろう。そしてその「和」は長い歴史とともに官僚から民に広

まり、その意味や関係性を拡大させていった。現在では村落共同体や社会における人間関係の情愛を表すようになっており、さらには為政者と民との関係、外国との関係などにまで派生して使われている。つまり、日本では僧侶が実践するようなことを世俗で一般の人々が行っており、それは今では宗教的実践というよりは当然のこと、あたり前のこととして捉えられている。このような意味では日本は「和」の国とも言うことが出来るだろう。

日本が世界からみて類まれであるのはその国の長さであり、日本は初代天皇である神武天皇の御世から現在に至るまで、およそ 2700 年もの間一度も断絶することなく皇室が続く世界最長国家である。世界歴代の栄華を極めた王朝も日本の皇室の歴史の長さにははるかに及ばない。その長い歴史のなかで、日本では多くの異質な人々、そして彼らの信仰の対象である異質な神々が一つにまとめられていった。この驚異的な国の長さは日本が比較的安定した支配体系を有していたことと関連している。ここで天皇の佇まいである京都御所に着目しよう。京都御所は平安時代から明治初期までの実に千年以上もの間機能してきたのだが、驚くべきことに、武装化されておらず、敵の侵入を容易に受けつける、言わば「丸腰」の佇まいである。一方、海外の歴史上の王城は世界中どこをみても堅固に要塞化したものがほとんどであり、その構えからも彼らが外敵や時として自国の民を恐れてきたことがわかる。そのようななかで京都御所が千年以上もの間、武装化しないまま存続し、国が減びることがなかったということ自体驚嘆に値することであり、またそれは日本が「和」の国であることの証にもなっている。「和」の精神は長い歴史をもつこの国のなかで培われ、悠久の時とともに広く深く浸透し、それは今では国民の一人一人に及んでいる。その典型的な例として、東日本大震災の東北の人々の行動があげられるだろう。あの惨劇のなかで東北の人々が発揮した忍耐強さと利己的に走らなかった態度はまるで一人一人が戒律を守る僧侶ではないかと思われるほどであった。世界が日本人のこの態度には非常に驚いたようだが、これも日本の「和」の文化の表れであるだろう。

次章では同じく東北の事例をあげながら、日本文化の「和」についてさらに探りたい。

2. 遠野の「座敷童子の間」

筆者は縁あって 2015 年 11 月末に岩手県遠野を訪ねる機会があった。遠野は柳田國男の『遠野物語』で有名だが、なかでも興味深かったのは遠野市が廃校を 2010 年に地元の交流拠点施設としてリニューアル・オープンした「遠野早池峰ふるさと学校」（以下、ふるさと学校と記す）である。写真 1 がふるさと学校の外観である。山奥にあり、決して交通の便がいい場に立地しているわけではないが、ふるさと学校としてスタートしてからは、東日本大震災のチャリティ

関係等で、国内外の著名人がよく訪れるようになった。それゆえ現在では写真2、3に見られるとおり、学校内も国際色豊かになっている。

かつて教室であった場合はレクリエーションの場となっているが、一つだけ明らかに異質な部屋があった。それが「光苔の間」であるが、通称「座敷童子の間」と言われている。座敷童子とは幸せをもたらす子供の姿をした妖怪であり、岩手県の各地でその伝承が伝えられている。「座敷童子の間」の室内の様子は写真4～8をみるとおりであるが、入口ドアをくぐると、中央部にクリスマス・ツリー、奥に神棚、その周囲には七夕用の笹など、統一感のないさまざまなオブジェやアイテムが並べられている。グルリと見回すだけで、その宗教的多彩さに目をみはる。たとえば写真5では、クリスマス・リースのすぐ上に神社仏閣にあるはずの絵馬が、そしてさらにその上には座敷童子の妖怪のポスターが貼られている。写真8の神棚には複数種類が祀られており、観音像の絵が壁にかけられているのも興味深い。訪問者たちが継続的にお供えものを置いた跡もあり、子どもが喜びそうな玩具、お菓子、果物、そして地元の特産物などが並べられている。お供え物の向きは、神棚から見た向きのもの、拝礼者からみた向きのものどちらもあり、その不揃いさが統一感をなくしているものの、形式張らない手作り感がそこにある。このように「座敷童子の間」は神道、仏教、キリスト教、妖怪が棲み分けすら行うことなく、同じ部屋に雑多に共存しているという何とも不思議な空間なのである。

そして人々の交流が盛んになるほどに不思議な現象が起こるようになった。例えば、長く仲違っていた父子が偶然、別々の機会に「座敷童子の間」を訪ね、短冊のメッセージをとおして心を通わすという出来事があった。偶然起こった感動的なエピソードはこれ一つだけではない。「座敷童子の間」をめぐるこれまでの「奇跡的」なエピソードの一つ一つがそこを「幸せを呼ぶ座敷童子の間」としての地位を確立するのに貢献するようになったのである。

私たちには「座敷童子の間」が本当に妖怪が出る部屋なのか、もしくは摩訶不思議な力が秘められている部屋なのか、それを確かめる術はない。不思議な現象とみなされているものは、実際は「座敷童子を見た」という子どもの見当違いな発言の結果であるかもしれない。また、幸せを運ぶ部屋の根拠となったストーリーの数々は単なる偶然であったかもしれない。幸福と不幸の両方があるなかで、たまたま人々が幸福な部分だけを抽出して語り継いでいるだけかもしれない。しかし、ここではそのようなことの真偽は重要ではない。噂は噂を呼び、現在ではここにある種の信仰の対象となりつつある。その信仰の対象が座敷童子なのか、神道なのか、仏教なのか、それとも何なのかまったく明瞭ではない。しかし実はその曖昧さこそがその部屋では重要なのである。



写真1 遠野早池峰ふるさと学校の外観



写真2 旧体育館

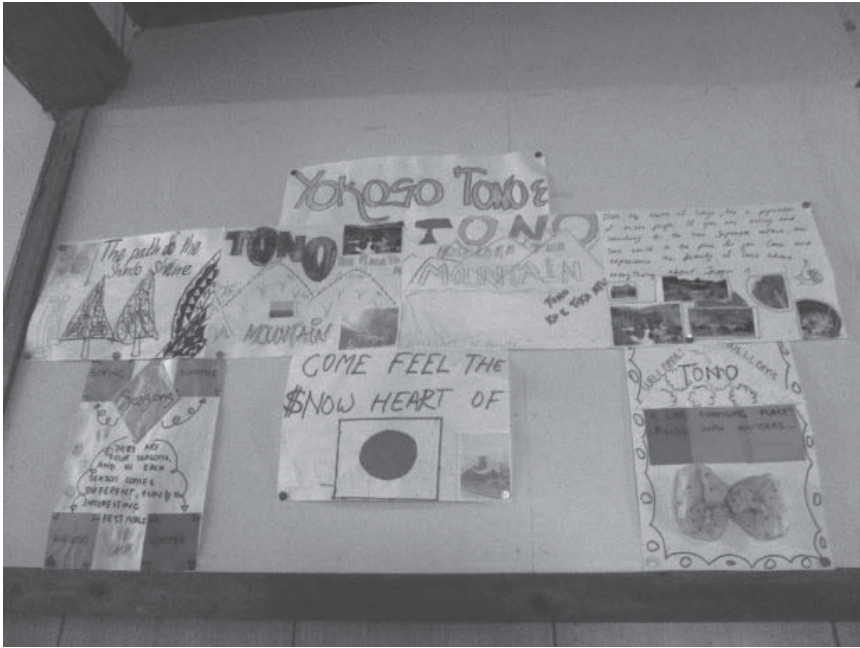


写真3 廊下の英字ポスター



写真4 廊下側から見た「座敷童子の間」



写真5 「座敷童子の間」内の一角



写真6 「座敷童子の間」内入口付近の風景



写真7 「座敷童子の間」内中央から奥の風景



写真8 「座敷童子の間」内の神棚

3. 世界の紡ぎ直し

世界は近代化、合理化が進むとともに、曖昧なものをいつの間にか嫌うようになった。世界がコントロールされるためには曖昧なものは明確化されなければならなかったからである。不

明瞭なものは区分化され、わかりやすく捉えられなければならない。

たとえばアフリカではもともと人々は区別もされておらず、民族名すらなかった。アフリカ人に民族名をつけたのはかつてそこを支配したヨーロッパ列強である。彼らがアフリカ人を支配しやすいよう区別し、彼らをカテゴライズしたのである。以降彼らのアイデンティティはその民族名にそって形成されることになった。1994年に起きたルワンダ虐殺もフツとツチの対立によるものだが、それは二つの民族がかつての支配者であるベルギーによって区別され、一方のみが優遇されたことに始まる。フツの長い間蓄積していた不満が内戦を生み出したが、もともとの原因がどこにあるかは歴史をみれば一目瞭然である。

医学の分野でも、それまで認識されてこなかったものを科学者たちが次々と見つけ出しては命名し、「病気」のカテゴリーにいれていった。昔は病気として扱われなかったものが、病気と認識されるようになり、最近では「病人」が頓に多くなっている。曖昧だったものを明確化することは、時としてプラスの効果が生み出されるが、しかし必ずしもいいことだけとは限らない。病名がつけられず、曖昧なままであれば問題なく過ごすことができたものを、病人に認定されたがゆえに、健常者とそうでない者として新たな差別が生み出されることもでてきている。病気や病名を発見するというのが即、人類の幸福につながるわけではないのである。

近代科学に優位性が置かれる現代では、世界の特徴あるものを囲いこみ、名前をつけ、他と区別してきた。そのカテゴライズを私たちは人類の叡智とみなしてきたが、しかし立ち止まって現状を振り返った時、本当にそれは人類の叡智なのであろうかと疑ってしまう。私たちはプライバシーが確立され、便利な生活を手に入れ、それに居心地のよさをおぼえてきたが、それと引き換えにおおらかさを失い、あまりにもすべてに対して神経質になりすぎるようになった。人々を幸せにするための人類の叡智と信じられてきたものは世界にさまざまな違いをつくりだし、その結果私たちを互いに排他的にさせてきたようにも見える。ごくわずかな者たちだけが手に入れられる物質的幸せをめぐる争い、世界は勝者と敗者が現れては報復の連鎖を繰り返すという悪循環に陥っているようにも見える。

マックス・ヴェーバーは合理化していく社会を悲観した社会学者として有名であるが、世界が合理化した最終段階には貧困化した理性しかなくなるとみなした。必ずしも彼の予想したものが的中したとは言えないが、現在のこのような状況をみると、あながち見当違いとは言えない。しかし、現代社会はヴェーバーが予想した世界ほど単純ではないし、また状況を踏まえてそれを打開し、未来を切り開く力を私たちはもっているはずである。たとえば、ハーバースはヴェーバーの理論を受け継ぎながらも、その合理性概念の狭さを指摘し、ヴェーバーの悲観的結末を拒絶する。彼は人々が目的論的行為からコミュニケーション的行為に転換させていく

ことで、近代社会の新たな展開を期待した。彼の理論は複雑で難解だが、シンプルにまとめると、分断されてしまった各領域群の紡ぎ直しを彼は提案している。分化しすぎて意味をなさなくなった無機質なそれぞれの領域を紡ぎ直すことで再び世界に意味を与えようというのである。

筆者が遠野の「座敷童子の間」で見た風景はまさにその紡ぎ直しを象徴していた。その部屋は一見統一されていない雑多なものが整理されることなく配置されている。遠野の人々は無意識にそのような部屋をつくりだしてしまったようだが、これは特に欧米の人々にはない発想である。その部屋にある曖昧さは境界づけられたそれぞれの緊張状態をなくし、相いれないものですら、すべてを抱擁する。神道、仏教、キリスト教、妖怪、それぞれは互いに異質であるが、そこに通う人々はそのような差異には注意を払わず、すべてに敬意を表していた。写真8からもわかるように、信仰の核となる神棚がすでに異質なものの融合から始まっている。座敷童子、アイヌ人形、神も仏も祀られている。近代アートとして意識してつくられたものではなく、地元の人々が自然につくりあげていったこと自体が非常に興味深い。

「座敷童子の間」の隅に置かれてあった一つの籠に着目しよう。写真9のとおり、そこの中には着物を着ている黒い肌の人形、そしてその傍らには洋風の帽子を被り、着物を着た日本人形があった。一見して国籍やルーツに困惑してしまう恰好である。地元の人々が無造作に二体の人形に服を着せ、籠に入れて飾っただけなのだろうが、そこにはものごとの固定したカテゴリーに忠実であろうとはしていない。「We（私たち）」と「You（あなたたち）」を明確に分ける必要性を彼らは考えてないのである。彼らにあるのは「We（私たち）」だけなのである。



写真9 「座敷童子の間」の隅にある二体の人形

筆者が文化人類学を専門にしているのはすでに述べたが、文化人類学の基本テーゼは文化相対主義である。それぞれの違いに価値を見出すことを当然とみなしている。現地調査中フィールドに長く滞在していると、自然と現地の人々と親しくなるが、その時調査者がそこで肌で感じることは、意外にも共通点だったりする。話す言葉が違う、立ち居振る舞いも違う、習慣も、世界観も違う。それにもかかわらず、なぜか彼らに対して「わかる」というシンパシーを感じる事が少くない。フィールドに通い始める前

までは、まったく違うと思っていたのに、すべてが違うということがない。なぜ私は彼らと同じように感じるのだろうか、異質なものに囲まれながらその疑問が自分のなかで際立って感じられた。おそらくこの地球上で人間が生を紡いでいくことに関して、たとえ互いにまったく異なる文化背景があったとしても、すべてにおける完全なる違いを証明することのほうが圧倒的に難しいように思える。

もちろん、このようなことは簡単に言うべきではないだろう。深い理解もなく、それぞれは同じルーツをもつ同質のものとして断言することは本質主義であり、新たな差別を生み出す。だからこそ人類学は文化を扱うことにかんして同一ではなく、差異を強調してきたのである。しかし、その差異を差異とみなした前提そのものが歪んでいたとするならば、そのうえで提唱される融和は表面的で、偽装的ですらある。もしくは差異を決定づける指標がその当時は適切であったとしても、時代が変わるとその指標自体を考え直さなければならない。そう考えると異なるものはあまりにも混沌として不確かなものではないだろうか。

そのような観点から遠野を見た時、彼らが差異を決定づける指標をなくし、境界を曖昧にしていることが写真からもわかるだろう。遠野の人々の感性には驚かされるが、しかし確かに立ち止まって考えた時、人類は分類すること、ものごとを明確にすることになぜこれほどまでに執着してしまったのかという疑問がわいてくる。どうしてなにごとにも明確にすることが人類の発展の証だと無意識に思うようになったのだろうか。私たちは自分たちの幸せがどこにあるのか、そして私たちが目指さなければならないのはどこにあるのか、もう一度原点に立ち戻って考える時期にきているのではないだろうか。

おわりに

世界は近代科学の叡智のもとで細かく分断されてしまった。一つ一つの断片は単体では意味をなさず、世界はねじれながら現在前進している。遠野の「座敷童子の間」は私たちに分断されたものをもう一度紡ぎ直すようメッセージを送っているようである。見た目が違うと、人は差異ばかりが目につく。しかし私たちは差異をつくりだしたものが適切なものだったのか、もう一度振り返って見直さなければならない。過去になされた「固定化」にかんして、もし時代が違ったら、もし場所が違っていたら、もし状況が違っていたら私たちが現在違いと信じているものが幻想でしかなくなる。幻想ではなかったとしても、分断された小さな世界のなかだけで生き続けることはできない。世界はそれぞれが協調しながら紡ぎ直されていかなければならないのである。そして紡ぎ直すには、それぞれが強張ってしまった関係性を緩めるためのお

らかさや、曖昧さが鍵となる。

「座敷童子の間」の曖昧さは日本の歴史が積み上げてきた「和」に通じる。そして日本人はどの国の人々よりも「和」の精神を発揮するのが得意な人々である。世界の情勢をみると、経済大国である日本がこれまで以上に世界のリーダーシップを果たしていくことが期待されている。他者を抱擁し、相手と協調し、敵をつくりださない世界のあり方が今、求められている。それは決して簡単なことではないが、21世紀は「戦争の世紀」と呼ばれるようであってはならない。移民・難民問題も一つの難題であるだろう。ただし受け入れることが唯一の解決策ではなく、私たちはこの「和」の精神の生かし方をもう一度知恵をもって模索しなければならない。日本から世界に発信していくべきものは多く、私たちの正念場は今後も続いていくであろう。

【参考文献】

ハーバーマス、ユルゲン

1985『コミュニケーション的行為の理論』（上）河上倫逸ほか訳、未来社。

ヴェーバー、マックス

1991『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波書店。